

昔は溝が深かった？！

前田、過去にも告白未遂

本日2004年5月29日(土)に拳式となった前田寛之(馬肉)と素子さん(29)であるが、前田氏には過去に数回の告白未遂・告白失敗の経歴を持つことがこの度明らかになった。その性癖は既に小学校時代から顕著に現れていたが、どれも実を結びことはなかったようだ。関係者はその原因について「口癖がよくない」「口のしまりがよくない」など好き勝手なことを証言した。一般人側では類友と見て

いる。
(下写真は小学校時代の両人のもの。赤丸左が素子さん。右が前田氏。二人の間に不自然な空間が見取れる)



告白失敗に ついての証言

噛ませ犬。アメリカで言えばロッキールポア、日本だったら赤井に挑んだ大和田正春とあったところか。おれはそんなことを考えながら電話を切った。

「またあのよだれ？」彼女がめんどくさそうに、ベットから起き上がる。

いつもそつだ。明日伊豆の白浜に行く約束なんて一切してない。なのになんであいつはレンタカーの予約をしてやがるんだ。

「だって女の子も3人くるからさ。全部で6人だろ。やっぱりでかい借りないとさ」理由になってねえ。約束してないんだ。あほ。しかも、またあの子がくる。もっちゃんだ。

あいつの小学校時代のクラスメイトといって、何回か一緒に飲んだり旅行に行ったりしていた。そんな時、前田はもっちゃんに擦り寄っていく。いつも垂れているよだれを拭いて

近づいていくから、すぐにお気に入りののがわかる。前田がもっちゃんといたいがために、俺と渡辺は利用されているんだ…。

しかし、今回だけはセオリードおりの噛ませ犬を演じてやろうと心にちかった。なぜならあれは…そつ確か2カ月前。

「おい。よだれ。おまえもっちゃんが好きなら早く告白しろよ！」(オシ)

「え。どうしよう。どうしよう。大丈夫？」(よだれ)

「大丈夫はおまえの口癖だ！大丈夫だよ！」(オシ)

1週間後…

「ふられた…もっちゃんにふられた…」(よだれ)

「泣くな！ハンカチでまず、よだれ拭け」(オシ)

オレがけしかけたせいで、前田はみごとにふられていた。

しょうがない。多分あいつにとてもラストチャンスだ。白浜でうまくいかなきやもう諦めるしかないだろう。

明日が晴れることを祈ろう…。

クリスポ CLISPO

平成 16 年 5 月 29 日発行
第三号 クリスポ編集会

白浜の旅行がどうだったかとかそういったことは気にしてはならない。もう過ぎたことはいいじゃないの、今が幸せなんだから。

写真(下)は最終日によく付き合うこととなった水上旅行のものである。二人が対極に位置しているように見える。



結局のところ前田氏の度重なる挑戦は続き、これまた蘆田氏・渡辺氏をタシにして決行された水上旅行の最終日、ようやく前田氏は素子さんと付き合うことになった。

アルバイト募集

アプリができて基盤ができて長時間労働に耐えられる方を募集中!

時給:業績次第
残業・タクシー代は支給いたしません。

担当 花澤(2492)

新太郎

世にも危険な
海外旅行編

「まずいな…」

2002年の10月、私は前田を含む3人の仲間と一緒にグアテマラを訪れていた。ティカルというマヤ文明最大の遺跡を訪れるため、深夜の密林をバスで向かっていた。

その途上、グリラらしき兵隊にバスを止められ、同乗者ともども外に出されていた。

「まずいな…」

もう一度、つばやく。

一人一人がバスに手をつかされ、ボディチェックを受けている。

そんな中、前田が話し掛けてくる。

「大丈夫、大丈夫。ビタミン食べる?元気になるよ」

彼はいつもビタミンで解決しようとする。

なによりもまずいのは、「大丈夫、大丈夫」と言い出したことだ。

やつらの「大丈夫」はトラブルの前触れだ。

「バリバリ・ムシャムシャ」

そんな心配を他所にビタミンをむさぼる前田。周囲には「かがり火」が無数に燃え盛る。銃を持つ兵士の顔は、明らかに足し算ができない顔だ。10まで数えられるかどうかとも覚束ない。

そんな緊迫した空気の中、どっかのアメリカ人がたばこを吸い出す。

「馬鹿っ、刺激をするなっ!」と、声に出さずに思う。

が、そのアメリカ人が私にもたばこを勧めてくる。

「オー、さんきゅう」

たばこをくゆらす自分が恥ずかしい。無数のかがり火の中を漂う紫煙は、幻想的な雰囲気をかもし出し、つかの間、現実を忘れる…忘れる…忘れる…

「がっ!これマリファナ…」

7期のゆかいな仲間達



ボディビルダー川口

常識人(俺)

前田、お前が大丈夫?

小心者蘆田

事態が、刻一刻と悪化する中、紫煙の向こう側で、前田がカメラを取り出そうとやっきになっている。あわてて前田にとびかかる。

「ばかっ!死にたいのかっ!」

「えっ、まずい?ちっちゃなーな山田は」

命の恩人に向かって何たる暴言。と思つても、馬鹿には勝てないと念じながら怒りを殺す。他の二人はどうかと見渡す。妻子持ちで小心者の蘆田は、開いた瞳孔でじっと地面を見つめている。しばらく帰ってきそうにない。ボディビルダー川口は大量の汗をかきながら、きよろきよろと当たりを見回している。危険を感じ取った私はマリファナをやつの口につっこみ、落ち着かせる。ふと横を見ると前田が蘆田の口にビタミンを押し込んでいる。彼なりに気を使っているのだろう。だが、彼の親切は迷惑で、ある意味テロだ。

突然、隊長らしき男が現れ、早くバスに乗れと追い立てる。

どうやら開放されるらしい。全く事態が飲み込めないが、急いでバスに乗り込む。無事にバスが走り出すと、

「な、大丈夫だったろ?」

と前田。私は、やつの口のまわりについているビタミンをそっと取ってあげながら、

「ああ、そうだな」と返す。

旅行中、もう一度「大丈夫、大丈夫」という言葉を聞く羽目になる。「スタリ力で嵐に会い、荒れた海の中に飛び込まなければならぬときだ。そんなことは露知らず、我々の旅は続く…。」

*この話はノンフィクションです。5%程度の表現上の誇張を含むものの、全て実話です。

あなたのシステム大丈夫?

株式会社

CLIS

世にも危険な 国内旅行編

「遅い！」私と蘆田は痺れを切らしていた。

『金曜・夜9時・東京駅』前日に電話で決めた旅行プランはこの3つだけだった。しかし、9時になっても前田と山田が来ない。前田に電話をすれば、「今起きた。どこに行けばいい？」という寝ぼけた回答。こいつが時間と場所を指定してきたはずだ。山田が遅れること30分。「宴会を抜けてきてやった！」と誇らしげに語る。そもそも、なぜ旅行の日に飲み会をぶつけるのだらうか？まったくもって話にならない。

旅行先は熱海になった。というのも、全員が集まる頃には熱海行きの電車しか走っていないからだ。車内で乾杯し、熱海に着いて泊まるところを探してみたが見つかるはずもない。周辺地図を見ながら途方に暮れる我々におじいさんが声をかけてきた。「うちに泊ま

って行け！」ああ、なんとという寛大なお方だらうか。掃き溜めのような我々を泊めたいとは奇特な方もいるものだ。

一泊3000円。「浜浜」というその旅館はこのあたりではかなりの名家（らしい）。しかし、様相からは一切そのような高級感を感じさせない。「名家とはそういうもんだ！」名家から一番縁遠い蘆田が大きく頷く。バ力は幸せである。

我々には二間の部屋が与えられた。「熱海に何しに来た？」と問われたが、それは我々も教えて欲しいところだ。前田が山田の首根っこを捕まえて、「こいつの嫁探しです」と真剣に答える。山田も恥ずかしそうにしている。バカ丸出しである。確か山田の嫁探しは、グアテマラ旅行で失敗に終わったはず……。我々は熱海に来た理由を考えるため、部屋で飲み始めた。

夜中3時を回ったとき、部屋の窓際で「ガン、ドスン」という尋常ではない音が木霊した。

旅館のおばあさんが我々のところに飛び込んで「3階から人が飛び降りた」と慌てふためく。「階段も使わずに降りてくるとは、なんと横着な」前田が憤慨するが、そういう問題ではない。

山田と裏庭に恐る恐る入っていく。奥に進むと、おじさんがコンクリートの上を手でピタピタと探っていた。「いやあ、メガネが落ちちゃって……」どうも話が違つようだ。我々も一

緒になってメガネを探してあげた。コンクリートの上に手を当てると、「ピチャリ」と濡れた感覚があった。私は山田と目を見合わせた。血だ。髪の毛もちょっぴり付いている。「部屋の隅っこにメガネを置いていたんだが、暗くて見えないんだよ。あれ？なんで俺外にいるんだ？」酒臭いおじさんは、支離滅裂な言葉を発する。月明かりの中、彼の頭に目を向けるとパツクリと傷口が広がっていた。

救急車が到着し、救急隊員が彼の頭にダイレクトに包帯を巻く。「どうだ？痛いかな？」と

隊員。「いやあ、迷惑かけちゃったよ。もう大丈夫だから皆さん帰って」と酔っ払いおじさん。「そうか、痛くなったら、また呼べよ」と言って、救急車は彼を残して帰っていった。おいおい。死んじやうぞ。この人。

翌日、おばあさんの話によると、あのおじさんは夜中に頭が痛み出して、再度自分で救急車を呼んだらしい。当たり前だ。脳みそ見えてたぞ。

どうやら、我々の旅行に尋常と言つ言葉はないらしい。前田が真剣な面持ちで語る。「どんなに短い時間であっても、ハプニングが勝手にいつてくる」と残りの3人は大きく首を横に振り「お前自体がハプニングなんだよ」と口を揃えた。

こうして熱海旅行の大きな目的は『人命救助』という、後付の理由で落ち着いた。夏のうちよっぴり甘い思い出である。

企画・編集のお申し込みは

(03) 5638-2335

クリスポ企画 渡邊まで